

令和7年度版 中学校国語教科書
『現代の国語』
指導書ダイジェスト



この資料は、一般社団法人教科書協会が定めた「教科書発行者行動規範」に則って作成しています。

令和7年度版 『現代の国語』

指導書ダイジェスト

1年【小説】「少年の日の思い出」

学習指導書では各教材について、主に次のように構成しています。

I 教材の研究

- 1 教材設定の意図
教材の系統図
- 2 教材の分析
- 1 教材の解釈（「読むこと」教材）
- 2 構成（「読むこと」教材）
- 3 教材の特色
- 4 語句・表現の解説
- 3 著者と出典（「読むこと」教材）
- 4 図版
- 5 「私の本棚」（「読むこと」教材）
- 6 参考

II 学習指導の解説

- 1 指導と評価の計画
- 1 指導目標
- 2 言語活動
- 3 評価基準
- 4 学習指導のアウトライン
- 2 学習指導の展開例
- 3 「学びの道しるべ」の解説（「読むこと」教材）
- 3 指導のポイント（「話すこと・聞くこと」「書くこと」教材）
- 4 ワークシート



少年の日の思い出

ヘルマン・ヘッセ

〔訳〕 高橋 健二

I 教材の研究

1 教材設定の意図

「トロッコ」において生徒は、少年時代を回想して語る構成の小説を読み、あこがれや喜びから不安・絶望へと転じる少年の揺れ動く心情と、将来の展望をもてずに生きる大人になった現在の良平とを重ね合わせて読み取ることを経験している。

本教材「少年の日の思い出」も、大人になった「現在」の場面と、過去の「少年の日」の場面とで構成される。少年時代の経験が現在の精神状態に深く関わっているということを、作品の構成や展開から読み取り、その表現の効果について考えることが重要なねらいとなる。

また、「実際話すのも恥ずかしいことだが」と語り始められた「少年の日の思い出」は、「一度起きたことは、もう償いのできないものだ」という「悟り」で結ばれる。クジャクヤママユの美にみいられ、欲望に逆らえなかつた「僕」の心情は、生徒にとっては共感しやすいものである。それに対し、謝罪を受け入れず、許しを与えようとしないエーミールの姿は、たとえ正義が彼の側にあるにしても、生徒は反感を覚えるかもしれない。「僕」の心情へ寄り添っている読者は、救われない結末に違和感を覚え、視点を變えてその違和感を検討することになる。人間の心情のあり方や関わり合いについてより深い思考へ導くことはもちろん、全てが合理的に解決するわけではない小説を読むことが、文学観を広げることにつながる。

教材の系統図 文学

小学校
五・六年

●登場人物の相互関係や心情などについて、描写をもとに捉える。
●物像や物語などの全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりする。
●文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめる。
●文章を読んでまとめた意見や感想を共有し、自分の考えを広げる。

一年

二年

三年

竜〈物語〉

◎場面の展開や登場人物の相互関係、心情の変化などについて、描写をもとに捉える。(Cイ)
○文章の構成や展開、表現の効果について、根拠を明確にして考える。(Cエ)

空中ブランコ乗りのキキ〈物語〉

◎場面の展開や登場人物の相互関係、心情の変化などについて、描写をもとに捉える。(Cイ)
○文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えを確かなものにする。(Cオ)

字のない筆書〈随筆〉

◎場面と場面、場面と描写などを結びつけて内容を解釈する。(Cウ)
○場面の展開や登場人物の相互関係、心情の変化などについて、描写をもとに捉える。(Cイ)

トロッコ〈小説〉

◎場面と場面、場面と描写などを結びつけて内容を解釈する。(Cウ)
○場面の展開や登場人物の相互関係、心情の変化などについて、描写をもとに捉える。(Cイ)

少年の日の思い出〈小説〉

◎文章の構成や展開、表現の効果について根拠を明確にして考える。(Cエ)
○文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えを確かなものにする。(Cオ)

セミンダグホームルーム〈小説〉

◎文章全体と部分との関係に注意しながら、登場人物の設定の仕方などを捉える。(Cア)
○観点を明確にして文章を比較するなどし、文章の構成や論理の展開、表現の効果について考える。(Cエ)

短歌の世界
短歌十首

◎文章を学ぼう① 人物設定

小さな手袋〈小説〉

◎登場人物の言動の意味などについて考えて、内容を解釈する。(Cイ)
○文章全体と部分との関係に注意しながら、登場人物の設定の仕方などを捉える。(Cア)

走れメロス〈小説〉

◎観点を明確にして文章を比較するなどし、文章の構成やよりの展開、表現の効果について考える。(Cエ)
○文章を読んで理解したことや考えたことを知識や経験と結びつけ、自分の考えを広げたり深めたりする。(Cオ)

握手〈小説〉

◎文章の種類をふまえて、論理や物語の展開の仕方などを捉える。(Cア)
○文章の構成や論理の展開、表現の仕方について評価する。(Cウ)

俳句の世界
俳句十句

◎文章を学ぼう① 回想

故郷〈小説〉

◎文章を批判的に読みながら、文章に表れているものの方や考え方について考える。(Cイ)
○文章を読んで考えを広げたり深めたりして、人間、社会、自然などについて、自分の意見をもつ。(Cエ)

坊っちゃん〈小説〉

◎文章を読んで考えを広げたり深めたりして、人間、社会、自然などについて、自分の意見をもつ。(Cエ)
○文章の構成や論理の展開、表現の仕方について評価する。(Cウ)

9 振り返り
見定める

2 教材の分析

① 教材の解釈

「チョウを見るくらい、幼年時代の思い出を強くそえられるものはない」(P 207・L 8)と述べているように、「僕(客・友人)」にとつて「チョウ集め」は「少年の日(≠幼年時代)」そのものである。「僕」の「チョウ集め」は、チョウを押し潰す結末部分で終わる。それは「少年の日」の終わり、つまり「少年」から「少年後」への変化を意味する。

「少年の日」が終わりを告げた契機は、「そのとき初めて僕は、一度起きたことは、もう償いのできないものだと悟った」(P 216・L 4) ことにある。これは、潰れてしまったクジャクヤママユが元には戻らないことと、「つまり君はそんなやつなんだな」(P 215・L 12) とエーミールからの「軽蔑」が決定づけられたことの両方を指している。回復不能な「美」と「信」の問題ともいえるよう。エーミールの存在と、彼から受けた軽蔑は、少年の理解を超えた世界を「僕」に見せる。謝れば許してもらえない、損なわれても回復できる、という子供らしい楽観が打ち消されることで、「僕」は、「少年後」の世界へと導かれる。それは明るく前向きな成長とはいえない。しかし、それもまた「少年の日」の終わりであり、「客・友人」として登場する現在の「僕」へとつながっている。自ら「けがしてしまった」思い出は、消すことのできぬ痛みを、現在に至るまで、「僕」に与え続けているのである。

② 構成

本作品は、「私」を語り手として、「私」自身の視点で描かれた部分(場面Ⅰ)と、「客(≠僕)」の視点で描かれた部分(場面Ⅱ～Ⅳ)とで構成されている。

場面	主な内容	時
I (P 206・L 1) ~ P 208・L 7)	「客」が「私」の収集したチョウを見て、思い出を語り始める。	現在
II (P 208・L 8) ~ P 210・L 17)	「僕」はチョウ集めのとりこになり、模範少年であるエーミールに珍しいコムラサキを見せるが、欠陥を指摘され、傷つけられる。	「僕」が十歳ぐらいになった夏
III (P 210・L 18) ~ P 214・L 6)	エーミールが持つ非常に珍しいクジャクヤママユを見に行くが、手に入れないという欲望に負けて盗みを行い、不安に襲われてポケットに入れた拍子に潰してしまう。	二年たつて食後
IV (P 214・L 7) ~ P 216・L 9)	母にうち明け、エーミールに謝罪するが受け入れられず、一度起きたことは償いのできないものと悟り、自分のチョウを一つ一つ押し潰してしまう。	夕方～夜

③ 教材の特色

1 「現在」から「少年の日」へ

「客」と「私」がいる夕方の書斎から小説は始まる。「私」には子供がいることから、二人は大人と呼べる年齢であることもわかる。話題はチョウ集めへと焦点化されるが、「私」にとっては「楽しみごと」の一つとしてよみがえったことが、「客」にはそれは受け止められない。

「客」が見せてほしいと言ったため「私」はチョウを見せ、客もまた「小さい少年の頃熱情的な収集家だったものだ」と回想しつつも、「その思い出が不愉快でもあるかのように」「もう、けっこう」と「口早に」言う。しかし「微笑」をたたえながら、「実話話すのも恥ずかしいことだが、ひとつ聞いてもらおう」と、「客」は語り始める。いくつもの矛盾がここにはある。

「客」が語り始める幼年時代の思い出が、楽しいものではなさそうだということは、「不愉快」や「恥ずかしいこと」という言葉からだけではなく、描かれた情景、特に明るさの描写からも予感される。

●もうすっかり暗くなっているのに気づき、私はランプを取ってマッチを擦った。すると、たちまち外の景色は闇に沈んでしまい、窓いっぱい不透明な青い夜色に閉ざされてしまった。(P 206・L 9)

●すると、私たちの顔は、快い薄暗がりの中に沈んだ。彼が開いた窓の縁に腰掛けると、彼の姿は、外の闇からほとんど見分けがつかなかった。(P 208・L 4)

●外では、カエルが遠くから甲高く、闇一面に鳴いていた。(P 208・L 6)

ここに共通するのは、「闇」である。日が落ちてしだいに暗くなっていくという時間の経過を示すだけではなく、これから語られることへの負の要素を予感させる。情景描写は、その場の様子や人物の心情を間接的に伝えるだけではなく、今後の展開を暗示するはたらかきももっていることがわかる。

「闇」の語は、最終場面でもう一度現れる。

●だが、その前に僕は、そつと食堂に行つて、大きなとび色の厚紙の箱を取つてき、それを寝台の上に乗せ、闇の中で開いた。(P 216・L 7)

ここにおいて「闇」が、「僕」の心情の把握と、小説の読後感を決定づける役割を果たしていることは疑いない。そしてこのことは、現在の「客（僕）」が、「少年の日の思い出」をすでに整理し冷静に語っているのか、それともまだ、心を乱され痛みを感じているのかを考へる手がかりにもなる。

2 「僕」の熱情

チョウ集めが、それを始めて二度めの夏を迎える十歳ぐらいの「僕」にとつて、いかに膨大で純粋な熱情をつぎこんだものであったか、たたみかけるように、豊かな表現で語られる。

●全くこの遊戯のとりこになり、ひどく心を打ち込んでしまい、そのため他のことはすっかりすっぱかしてしまった(P 208・L 10)

●チョウを採りに出かけると、学校の時間だろうが、お昼ご飯だろうが、もう塔の時計が鳴るのなんか、耳に入らなかつた。(P

208・L12)

・休暇になると、パンを一切れ胴乱に入れて、朝早くから夜まで、食事になんか帰らないで、駆け歩くことがたびたびあった。(P 208・L13)

・子供だけが感じることでできる、あのなんともいえず、貪るような、うっとりとした感じ (P 208・L17)

・捕らえる喜びに息もつまりそうになり (P 209・L7)

・その緊張と歓喜ときたら、なかった。(P 209・L9)

・微妙な喜びと、激しい欲望との入り交じった気持ちは、その後、そうたびたび感じたことはなかった。(P 209・L10)

感情表現を列挙するだけで、常軌を逸したともいえる熱中ぶりが伝わってくる。

その熱情は二年たつても「まだ絶頂」にあり、エーミールがクジャクヤママユをさなぎからかえしたといううわさを聞くと、「クジャクヤママユほど僕が熱烈に欲しがっていたものはなかった。」と、熱をもって語られる。それは「この宝を手に入れたという逆らいがたい欲望」へとつながり、盗みを犯した当初は「大きな満足感のほか何も感じていなかった。」とまで言い切るのである。その後良心が目覚めたあとにも、「盗みをしたという気持ちより、自分が潰してしまった美しい珍しいチョウを見ているほうが、僕の心を苦しめた。」と語っている。読者が、「僕」の盗みを、「魔が差した」「仕方がない」などと擁護したくなるのも、こうした叙述の積み重ねによるところが大きい。

3 少年の「僕」と少年後のエーミール

丹藤博文は、「『チョウチョ』」収録の仲間からの称賛を得たい、とりわけ「エーミール」に勝ちたいという〈欲望〉を指摘する(＊)。周囲の他の者の立派な道具に比して「幼稚な設備」を持つ劣等感が「自分の妹たちだけに見せる習慣」を生み、その習慣を破ってまで見せたいと自信をもっていた「珍しい青いコムラサキ」が、エーミールから「こつびどい批評」を受ける。「僕」の盗みは、エーミールへの意趣返しとはいえないが、クジャクヤママユの持ち主がエーミールではない少年であったら事件は起らなかったといえるか。それとも、クジャクヤママユにみいられた「僕」は、やはり同様の過ちを犯しただろうか。

「非の打ちどころがないという悪徳」「子供としては二倍も気味悪い性質」をもつ者として語られるエーミールは、「僕」の基準では全く理解不能な存在である。「子供」「模範」少年」と呼んではいるが、「僕」と同じ程度の世界にいる者ではない。エーミールをどのように捉えればよいかわからず、「妬み、嘆賞しながら彼を憎んでいた」と、支離滅裂な感情をもつのである。

エーミールは「少年後」の世界にいる。チョウ集めへの姿勢にしても、「僕」の「熱情」や「喜び」に対して、エーミールの正確な手入れが強調されていることに、それが表れている。

エーミールは、いくら「僕」を責めても、代わりにおもちゃや別のチョウをもらつても、クジャクヤママユが元に戻らないことを知っている。「一度起きたことは、もう償いのできないものだ」ということをすでに悟っているのである。それがまだ理解できていなかった少年の「僕」は、エーミールの喉笛に飛びかかりたい衝動を

抑えることしかなできない。読者である生徒たちも、「僕」やエーミールとほぼ同年齢であり、この「悟り」を得ているか否かで、「僕」やエーミールの人物像の捉え方や評価が変わってくるだろう。

エーミールに対する呼称を整理し、その否定的な印象が、「僕」の視点で描かれているゆえであることを確認して、読者のエーミールへの評価を再考しておく必要がある。

また、「どれかをうめ合わせによりぬいてもらうように、申し出るのです」「許してもらおうように頼まねばなりません」と「僕」に促す母も、謝罪と代償で事に対処しようとしている。そこには、そうすることで許しを得られ、悩みや苦しみから解放されるという思想が背景にあると考えられる。「僕」が自らの過ちを乗り越えて成長するために、あえて厳しい態度で接しているのである。さらに、戻ってきた「僕」を無言のままに受け入れる母の姿は、エーミールとは対照的である。謝罪を受け入れず、ただ軽蔑し続けるエーミールは、人と人との関係から成り立つ社会の一員としてみれば人間的ではないと感じるかもしれないが、ある意味では人間の真理の一面でもある。一方、人の過ちを受け入れ、許すという母の行為は、人間としての理想ではあるが、我が子を思う愛情の表れともいえるように、対照的に描かれた二人も、単純な善悪で割り切れるものではないことから、さらに議論を深めていくことができる。

*丹藤博文『文学教育の転回』（教育出版、二〇一四年）P 98

④ 語句・表現の解説

206ページ

1 客 この「客」は、これ以降、「彼」「友人」という呼び方で登場する。「彼」「友人」が出てくるたびに、誰を指しているかを確かめるようにする。さらに後半では、この「客」の視点で過去の場面が描かれ、「僕」という一人称で登場する。

2 消えうせようとしていた 「消えうせる」は、そこにあつたものが消えてなくなることを。昼間の明るさが消えていく情景を描写することで、これから展開する物語が明るいものではないことを暗示している。

2 色あせる^⑤ 鮮やかな色が失われること。夕日が沈んできて湖の日がささなくなり、色がくすんで見える様子を表している。

3 かなた 遠く向こうの方。

5 よみがえって 「よみがえる」は、失われていたものが元に戻ること。大人になって忘れていた子供の頃のことだが、自分に子供ができたことよって思い出されたのである。

6 チョウ 作品中には、キアゲハ、コムラサキという二種類のチョウと、ワモンキシタバ、クジャクヤママユという二種類の蛾が出てくるが、ドイツ語ではチョウと蛾とを区別する言葉がないため、全て「チョウ」と訳されている。ドイツ語でチョウと蛾を区別する場合、チョウは「昼」を意味する「Tag-」を、蛾は「夜」を意味する「Nacht-」を語頭につけて表すのが一般的である。「クジャクヤママユ」はドイツ語の「Das Nachtfalenaugen」という。

7 お目にかけてようか 「お目にかけてる」は、「見せる」の謙遜した言い方。自分の趣味が相手に合うかどうかまだわからないため、遠慮してこのように言っている。

10 たちまち意 ごく短い間に。あつというまに。

10 闇に沈んで 一面が暗闇になって。ランプに火をともしたことでその場所だけ明るくなり、日が沈んだ外の景色がより暗く見えることを表している。時間が経過して暗くなったことを表しているだけでなく、今後の物語の展開や「客」の心情を暗示している。

12 きらびやか意 輝くほど派手で美しい様子。周囲の暗い雰囲気とは対照的に描かれている。

207ページ

6 ピンのついたまま……羽の裏側を見た チョウの扱いに慣れたしぐさであり、「客」がかつて収集家であったことがわかる。

9 そそられる 「そそる」は、気持ちを引きつけて、ある感情を起こさせること。チョウの収集を見ることがきっかけとなり、幼年時代のできごとが思い起こされている。

10 熱情的意 燃えるような激しい感情がこもっている様子。

13 もう、けっこう 「けっこう」は、丁寧に断るときに使う言葉だが、口早に言い放っていることから、チョウを直視し続けることが耐えがたいという暗い響きが感じられる。

14 その思い出が不愉快で……口早にそう言った 「客」にとつて、幼年時代の思い出が暗く悲しいだけでなく、思い出したくないものであることが予想できる。「客」が過去を回想する後半部分の伏線にもなっている。

16 微笑 声を出さずににっこり笑うこと。不愉快であるかのような感情を表に出してしまったが、冷静になり、私に対する配慮として笑みを浮かべている。あとの「悪く思わないでくれたまえ」につながつている。

16 巻きたばこ 細長く巻いたたばこ。紙巻きと葉巻がある。

208ページ

2 けがしてしまった よごしてはならない大事なものや美しいものを、よごしてしまうこと。美しい少年時代の思い出を忌まわしく恥ずかしい思い出にしてしまったということを表す。

3 ひとつ 多少迷った末に、とにかくなにかをしようとする気持ちを表す。「一つの試みとして」という意味がこもっている。

5 彼の姿は、外の闇からほとんど見分けがつかなかった 姿が闇に紛れるほど暗い場所で「客」は語り始める。自分でけがしてしまっただけでなく、過去の聞かせようとする「客」の心情を暗示している。

7 甲高く、闇一面に鳴いていた 「甲高い」は、頭に響くほど、声の調子が高いこと。カエルの甲高い声によって、「私」と「客」の周囲の静寂がいっそう際立ってくる。

8 僕 この「僕」は、ここまで登場した「私」ではなく、「彼」「客」「友人」と呼ばれていた人物である。

10 とりこになる意 なにかに熱中すること。「とりこ」はもともと「敵に捕らえられた人」という意味で、なにかに心を奪われて逃げ出せない状態であることを表す。

11 すっぱかさ意 しなければならぬことをしないで、そのままに

しておくこと。方言の「ほかす」（＝捨てる）に接頭語の「す」がついた言葉。チョウ集めに熱中すると他のことは全て放置してしまうという性格をおさえることが、「僕」の行動や心情を捉えるうえで重要である。

- 12 学校の時間だろうが……駆け歩くことがたびたびあった チョウ集めに熱中し、他のことをすっぱかす姿が具体的に描かれている。
- 16 身にしみる意 体の奥までしみ込むように感じる事。自分で思いう出をけがしてしまつたと言いながら、今でも当時の熱情をしみじみと感じるといふ複雑な感情がうかがえる。
- 17 貪る意 どれだけでも満足しないで、それを欲しがったり、そのことを繰り返したりすること。幼い純粋な欲求を表しているが、その盗みを犯すという行動にもつながる感情である。

209 ページ

- 2 無数の瞬間 その後の「荒野の焼きつくような昼下がり」「庭中の涼しい朝」「森の外れの夕方」などに表されている。朝から夕方までという時間軸と、身近な庭から遠くの森までという空間軸との両面から表され、「僕」のチョウに対する熱中ぶりを際立たせている。

- 3 昼下がり 正午を過ぎて、やや時がたった頃。午後二時頃。
- 4 神秘的意 人間の力では解き明かせないような不思議さがある様子。
- 7 息もつまりそうになり 「息がつかまる」は、うっとうしさや緊張で息苦しくなるという意味の慣用句。喜びがこみあげてきて、息苦しいくらいになったということを表している。

- 7 しだいに忍び寄って 斑点↓羽の脈↓触覚の毛と、だんだんとカメラが被写体に近づいていくように、細部が描かれている。

- 15 宝物 「僕」のチョウに対する思いの強さを表している。一方、エーミールが収集したチョウは、「宝石」（P 210・L 7）と表現している。「宝物」は、自分にとって価値のあるものであり、「宝石」は、自分だけでなく、世間一般にも価値があると認められたものである。この対比からも、「僕」とエーミールのチョウへの思いや扱い方の違いが読み取れる。

210 ページ

- 3 得意の余り 「……の余り」の形で、「……の程度がひどい、その結果」という意味。コムラサキを収集したことで興奮し、誇らしい気持ちで満ちあふれているということを表している。

- 4 せめて意 最低これぐらいは。十分ではないが少なくとも。
- 5 非の打ちどころがない意 全てが完全で、悪いところが全然なく、文句のつけようがないこと。

- 5 悪徳意 人の道に背くような、ひどい心や行為。
- ↑ 対美德 誠実や勇敢など、人の道にかなった、見習うべきよい心や行為。

- 6 子供としては二倍も気味悪い性質 人間なら誰しも欠点があるものだが、それが無いというのは気味が悪く、親しみがもてない存在である。大人ですらそうであるのに、子供であればなおさら気味が悪いということが、「二倍も」という表現から読み取れる。
- 9 模範少年 のちにエーミールだとわかる、隣の子供のこと。彼は、チョウ収集はもちろん、その他の点でも模範的な少年であり、

チヨウのことを考えると全てを見失ってしまう「僕」とは、およそ異なる性格である。これがやがては二人の間に大きな考え方の違いとなって表れてくる。

10 妬み 自分にはできない技術をもち、あらゆる点で自分よりも優れているエーミールを羨んで、憎らしいと思っている。「嘆賞しながら彼を憎んでいた」という似た意味の表現が繰り返されており、その感情の強さがうかがえる。

10 嘆賞意 心からすばらしいと思ひ、褒めたたえること。

12 値ぶみ 品物を見て、値段の見当をつけること。エーミールの性格が表れた、子供らしくない、大人びた態度である。

13 難癖をつけ始め 「難癖をつける」は、なにかと欠点をほじくり出して、悪くいうこと。わざとらしく、いじわるな言い方をするという意味が含まれており、「僕」がエーミールの行為をそう感じていることがわかる。

14 欠陥 そのものの価値やはたらきを大きく損なうような重大な欠点。

15 その欠点を大したものとは考えなかった 「もつともな欠陥」であるにもかかわらず、エーミールの指摘を素直に受け入れず、無理に探し出した欠点であると自分本位に考えている。「僕」とエーミールの認識の違いがはっきりと表れている。

15 こつびどい 言葉や仕打ちが、とても厳しいこと。「ひどい」に接頭語の「こ」がついた言葉。

211ページ

11 呈する意 ある状態を示すこと。「思いがけぬ外観を呈する」で、

予想外の姿をしているということを表している。

15 それが僕にはどのくらい羨ましかったかわからない 「僕の両親は立派な道具なんかくれないなかつた」(P 209・L 12)と対照的であり、二人の境遇の違いを表している。このことも二人のものの見方や考え方の違いに大きく影響している。

212ページ

5 毛の生えた赤茶色の触覚や……間近から眺めた だんだんとチヨウの細部が見えてくる様子が表現されている。P 209・L 7～9と同様に、あたかもカメラが被写体に近づいていくような描写である。

6 優雅意 ゆつたりしていて、上品なこと。優しい美しさのあること。

9 誘惑 人の心を迷わせて、よくないことに誘い込むこと。クジャクヤママユの斑点を見たいという強い思いであり、まだ手に入れないという気持ちには至っていないが、夢中になると善悪の判断さえ失ってしまう「僕」の性格が表れている。

10 四つの大きな不思議な斑点が……僕を見つめた 斑点はクジャクヤママユの最も魅力的な部分である。その斑点にみせられてしまう「僕」の心情が、「斑点」を主語とした擬人法を用いて表現されている。

11 逆らいがたい欲望 斑点を見た瞬間に、「僕」の道徳心は失われ、手に入れたいたい気持ちを抑えきれなくなる。

213
ページ

1 さしずめ^① 今のところ。盗みを犯した罪悪感や、将来発覚してしまうかもしれない不安は全くなく、今はチョウを手に入れた満足で満たされ、他のことが見えなくなっている。

5 下劣^② 品性が卑しいこと。

6 本能的 そういう行動をとる性質を生まれながらにもっているかのような様子。人の気配を感じて見失っていた良心が目覚め、自分の身を守るために、自然と隠すという行為に出たことを表している。

7 だいそれた その人の身分や立場などから考えて、あまりに非常識だ。とんでもない。

16 不幸 ポケットから出したクジャクヤママユが潰れてしまったことを指す。自分が引き起こしたにもかかわらず、「不幸が起った」と表現している。そんなつもりはなかったという自己弁護的な言い回しである。

16 泣かんばかり 「……ばかり」で、今にもそうなりそうだという状態を表す。

214
ページ

1 繕う^③ 破れたり壊れたりしている所を直すこと。

2 盗みをしたという気持ちより……僕の心を苦しめた 自分のもものならなかったとしても、貴重な美しいクジャクヤママユは、「僕」にとってかけがえのない価値のあるものである。それが壊れた状態にあることは、盗みを犯した罪悪感をはるかに上回る重

大な問題であり、大変な不幸であることを表している。「僕」のチョウに対する考え方がよく表れている。

8 告白 キリスト教社会において、告白や懺悔は、悩みから解放され、苦しみから救われるための重要な方法とされている。本来は、神に罪を告白して許しを求めるものであるが、こうした思想を背景に、罪を告白することが罰に耐えるより勇気のあることだと、母は感じているのである。その点をふまえて、このあとの母とエーミールの態度を比較するとよい。

9 忍ぶ^④ つらいことをじつと我慢すること。

15 彼が僕の言うことを……信じようともしないだろう 「僕」がエーミールにわかってもらいたかったことは、クジャクヤママユを盗んだのは悪意があったからではなく、その美しさにみせられてしまったためであるということと、盗みをしてしまったけれども、すぐに返すために戻り、もちろん壊すつもりなどなかったことである。しかし、「僕」のもっているエーミール像からしても、わかってもらうのは無理だと感じている。

215
ページ

6 丹念^⑤ 十分に心が配られていて、丁寧である様子。自分のもつ技術を最大限使ってなんとかもとに戻したいという、エーミールのチョウに対する思いが表れている。

7 直すよしもなかった 「よし」は、手段・方法のこと。「……よしもない」で、手段や方法、手立てがないことを表す。

8 説明しようと試みた 「説明した」ではなく、「説明しようと試みた」という表現になっている。説明しても理解してもらおうことが

難しい内容であり、まして相手がエーミールであることが、さらにそれを困難なものにしていることがわかる。

11 **そうか、そうか、つまり君はそんなやつなんだな** エーミールが「僕」を「そんなやつ」と決めつけている。「そんなやつ」とは、人が大切にしているものを盗み、壊してしまうような下劣な人のことである。

13 **僕のおもちゃをみんなやる** 母の「おまえの持っているものうちから、どれかをうめ合わせによりぬいてもらおうように、申し出るのです」(P214・L13)という言葉に起因しているが、まずはチヨウではなく、おもちゃを差し出そうとした。この窮地に立つても真っ先にチヨウを手放すと言い出せなかった「僕」の未練がうかがえる。

14 **軽蔑** 人や物事を「卑しい」「劣っている」などと見下げること。この後に、「あなどる」など、エーミールが「僕」を見くだす表現が続く。「軽蔑」はP216・L3でも使われている。

15 **けっこうだよ** 丁寧な断りの言葉の中に、エーミールが「僕」を軽蔑し、拒絶する冷たい響きが感じられる。冒頭の現在の場面で、「客」が「もう、けっこう」と言ってチヨウを見るのをやめたのは、このエーミールの発言を意識したもののか。

15 **君の集めたやつはもう知っている** 「僕」が「獲物」や「宝物」と表現している大切な収集を、エーミールは「やつ」といって軽視している。

16 **君がチヨウを…見る** ことができたさ 冷淡な言葉の中に、エーミールの強い非難の気持ちを感じられる。チヨウを熱情的に愛していた「僕」にとって最も傷つく言葉であり、プライドを踏みに

じるものである。この言葉が、エーミールに対する憎悪を最高潮にさせた。

18 **すんでのとところで** 意 あやうくもうちよつとのとところで。

18 **あいつ** これまで「エーミール」や「彼」などと呼んできたが、このみ「あいつ」と表現している。思い出を語っている現在でも、エーミールのことを憎らしく思う気持ちが高まっていることがわかる。

216ページ

1 **悪漢** よくないことをする男。「漢」は、男の人という意味で、接尾語的に用いる。

2 **正義を盾に** 「盾」は、自分を守るための手段や口実のこと。正義という絶対的な正しさを掲げて堂々としているエーミールの姿を表現している。

2 **あなどる** 意 人の能力や状態を低く見て、ばかにすること。

3 **罵りさえしなかった** 「罵る」は、口汚く悪口を言って非難すること。少なくとも罵る相手の存在は認めている。罵りさえしなというのとは、相手の存在すら認めていないことになり、罵るだけの価値もないとみなしているのである。軽蔑する行為の極致である。

5 **根ほり葉ほり聞こうとしないで** 「根ほり葉ほり」は、細かいことを一つ一つ問いただす様子。母は、「僕」の謝罪がエーミールに受け入れられなかったことを十分理解したうえで、無言のまま大きな気持ちで包みこんでいる。罪を告白し、自ら謝罪にいったことで、母の中では「僕」の罪は許されているのである。

7 そつと食堂に行つて 家族に気づかれないように、闇の中でチヨウを潰すのである。

3 著者と出典

著者 ヘルマン・ヘッセ 一八七七年—一九六二年。詩人・小説家。ドイツの生まれ。一四歳のときに神学校に入学するが、まもなく退学し、その後書店の見習い店員などを経験する。二一歳のときに最初の詩集『ロマン的な歌』を発表。二七歳で『郷愁』を発表し、一躍有名になる。二八歳で代表作となった『車輪の下』を発表する。これは、神学校を退学した頃の苦悩や挫折を背景に描かれたものである。主な作品に、『春の嵐』『デミアン』『シツダールタ』『ガラス玉演戯』など。一九四六年、ドイツ最高の文学賞であるゲーテ賞と、ノーベル文学賞を受賞。

訳者 高橋健二（たかはしけんじ） 一九〇二年—一九九八年。ドイツ文学者。東京都の生まれ。東京帝国大学文学部独文科卒業。一九三二年、ドイツに留学。その際、スイスに移住していたヘッセを訪問する。ヘッセやエーリッヒ・ケストナーの翻訳のほか、ゲーテやグリム兄弟など、ドイツ文学に関する著書は多数。一九六三年に『ケストナー少年文学全集』（岩波書店、一九六二年）の翻訳で産経児童出版文化賞受賞、一九六八年に『グリム兄弟』（新潮社、一九六八年）で芸術選奨文部大臣賞受賞。

出典 『ヘッセ全集2』（新潮社、一九八二年）

4 図版

P 207 ランプの光に照らされる、チヨウの収集が入っている箱。ランプの光のあたたかさ、周りの暗がりとを対照的に描いている。チヨウの鱗粉のような光が散っている演出により、幻想的な作品の世界観を見事に表現している。この演出は、以降全ての挿絵に施されている。

P 209 古いボール箱に収集された、さまざまなチヨウ。立派な道具はなかったが、大事にしまわれ、宝物となっている収集を描いている。キアゲハやモンシロチヨウ、ベニモンオオキチヨウなど、比較的よく見かけるチヨウが並ぶ。

P 212 エーミールの部屋をのぞく「僕」 階段を下から見上げる構図によって、読者はこのあとの物語の展開へ期待をふくらませる。開いた扉の隙間からさし込む光は、クジャクヤママユを見たいと思う「僕」の胸の高鳴りを表現している。

P 216 寝台の上で箱を開く「僕」 このあと「僕」は、一つ一つチヨウを押し潰すという衝撃的な行動をとるが、その表情までは描かれていない。鱗粉のような光の演出は、こなごなに押し潰されたチヨウのイメージとも重なる。

画家 宮崎ひかり（みやざき ひかり）

5 「私の本棚」

●『車輪の下』（ヘルマン・ヘッセ、「訳」高橋健二、新潮社、一九八五年）

内容 勉学優秀で繊細な少年ハンスは、父親や地元の人たちの期待を一身に背負い、自らの欲望を押し殺して猛勉強の末、二番の成績で神学校に入学する。トップをめざして学問に励むが、詩人志望で天才肌の友人ハイルナーの影響もあって、自分の生き方に疑問をもつようになる。やがて、心身ともに疲弊し、退校へと追いこまれたハンスは、故郷に帰り機械工となったが……。ヘッセの自伝的要素が強いといわれる作品。秀でた才能をもつ少年の生きづらさが、文学の香り高く描かれている。巻末に作者の年譜を付す。

●『自転車少年記』（竹内真、新潮社、二〇〇六年）

内容 三〇代半ばの主人公・昇平の回想記。物語は、高校を卒業した昇平、草太、伸男が、生まれ育った南房総から東京に向けて自転車で旅立つところから始まる。少年時代に別れを告げ、新しいステージへ進む昇平たち。学生生活、恋愛、就職、出産、転職、それぞれのエピソードには必ず自転車が登場する。毎年仲間の輪が広がっていく東京発糸魚川行き自転車ラリーは圧巻。自転車を媒介に、仲間とともに成長していく幸福感を謳い上げた青春小説であり、息子・北斗とともに走る家族小説ともいえる。読後感のさわやかな一冊。

著者 竹内真（たけうち まこと） 一九七一年―。小説家。新潟

県の生まれ。大学在学中の一九九五年に「ブラック・ボックス」で三田文学新人賞受賞。著書に『粗忽拳銃』（集英社、一九九九年）、『カレーライフ』（集英社、二〇〇一年）、『風に桜の舞う道で』（中央公論新社、二〇〇一年）、『じーさん武勇伝』（講談社、二〇〇二年）などがある。

●『一房の葡萄』（有島武郎著、デジタルテキスト）

内容 小さい頃、横浜の学校に通っていた「僕」は、ジムの持ち物である舶来の上等な西洋絵具を盗み、すぐ露見して級友たちに先生の部屋へ連れていかれた。好きな先生に自分の盗みを知られるのがつらく、「僕」はしおれたが、「僕」の深い悔恨を見てとった先生は窓の外の葡萄蔓から一房の葡萄をもぎって、しくしく泣く「僕」の膝に置いてくれたのだった。

著者 有島武郎（ありしま たけお） 一八七八年―一九二三年。小説家。東京都の生まれ。横浜英和学校、学習院中等科を経て、札幌農学校卒業。武者小路実篤、志賀直哉、弟で作家の里見弴らとともに「白樺」を発刊し、多くの作品を発表した。著書に『カインの末裔』、『生まれ出づる悩み』、『或る女』などがある。記者・波多野秋子と軽井沢の別荘で心中した。

6 参考

① 初稿作品と後年の改稿作品

「少年の日の思い出」は教科書教材として日本国内で広く知られるところだが、原作、そして翻訳も唯一ではない。

初稿作品は、「Das Nachtpfauenauge」（「クジャクヤマムユ」のドイツ語名）という題名で、ヘッセが三四歳であった一九一一年に発表された。この初稿作品は、ヘッセのその後の作品集にも多く収録されている。

その後、ヘッセはこの作品全体に手を加え、「Jugendgedenken」（直訳すると「青少年期の記憶」となる）と改題して、ドイツの地方新聞に発表した。初稿作品の発表から二〇年を経た、一九三一年のことである。しかし、この改稿作品は、ドイツ語圏においては現在までヘッセ全集などに収録されていないため、ほとんど知られていないという。

② 高橋健二氏と改稿作品との出会い

ヘッセを訪問したドイツ文学者の高橋健二氏は、「列車の中で読みなさい」と新聞の切り抜きを手渡された。それが、改稿作品「『Jugendgedenken』であったという。帰国した高橋氏はそれを翻訳し、いくつかの書籍に発表した。一九三六年から一九四〇年頃のことである。

それが当時の文部省国語教科書編纂者の目にとまり、中学国語の教科書に掲載された。初めて掲載されたのは、一九四七年の『中等国語 二(2)』（文部省）であった。

教科書教材として高い評価を得た「少年の日の思い出」は、その後複数の教科書に掲載されるようになり、今日に至っている。

③ 初稿作品の翻訳

初稿作品「Das Nachtpfauenauge」も、一九八四年に翻訳・発表され、のちには教科書教材としても収録された（『現代の国語 1』平成一四年度版、三省堂）。翻訳したのは、大学で高橋健二氏に学んだ岡田朝雄氏であった。

岡田氏は、中学三年のときに、教科書で「少年の日の思い出」を初めて読んだ。当時からチョウの採集と飼育に夢中になる少年であり、「少年の日の思い出」は大変印象深い作品であったようである。大学進学後、「少年の日の思い出」の原書「Jugendgedenken」が、ドイツ語の教科書として日本の出版社から出ていることを知り、取り寄せてドイツ語で読んだ。原書を読むことでチョウや蛾のドイツ名が判明し、長年疑問に感じていた部分がよく理解できたことや、高橋氏に話したところ「よく調べたね」とほめてもらったということ、を、のちに語っている。

その後、岡田氏は初稿作品の翻訳をした際に、題名を「クジャクヤマムユ」とした。岡田氏は、「初稿『クジャクヤマムユ』と改稿『少年の日の思い出』とを比較すると、内容的にはほとんど差がないものの、当然のことながら、二〇年後に推敲して発表された『少年の

日の思い出』のほうが文学作品としての完成度は高いと思います。」と述べている（*）。

* 『ヘルマン・ヘッセ「少年の日の思い出」』ヘッセ昆虫展記録集（福山会場）』（「編」ヘルマン・ヘッセ「少年の日の思い出」展を記録する会、二〇一四年）

4 参考資料

- 『車輪の下』（ヘルマン・ヘッセ、「訳」高橋健二、新潮社、一九五一年）
- 『デミアン』（ヘルマン・ヘッセ、「訳」高橋健二、新潮社、一九五一年）
- 『ヘッセ詩集』（ヘルマン・ヘッセ、「訳」高橋健二、新潮社、一九五〇年）
- 『蝶』（ヘルマン・ヘッセ、「編」フォルカー・ミヒェルス、岩波書店、一九九二年）
- 『評伝ヘルマン・ヘッセ——危機の巡礼者 上・下』（ラルフ・フリードマン、「訳」藤川芳朗、草思社、二〇〇四年）
- 『ヘルマン・ヘッセを旅する』（「写真・文」南川三治郎、世界文化社、二〇〇二年）
- 『人は成熟するにつれて若くなる』（ヘルマン・ヘッセ、「編」フォルカー・ミヒェルス、「訳」岡田朝雄、草思社、二〇一一年）
- 『ヘッセの読書術』（ヘルマン・ヘッセ、「編」フォルカー・ミヒェルス、「訳」岡田朝雄、草思社、二〇一三年）

「少年の日」は「僕」を苦しめ続ける

なぜ「僕」は自分のチョウをこなごなにしたのか

「少年の日」の思い出だけなら、第一場面の、書齋の主である「私」と「客」(回想場面での「僕」)のやり取りはいらない。もしくは、回想場面の最後から、冒頭の場面に戻るのが形式的には自然である(現在—回想「過去」—現在)。

なお語り手は、厳密に言えば、物語を一貫して「私」であり、少年の日の回想も「客」が現在語ったものを「私」が忠実に再現しているのである。したがって「客」が語ったのは過去のできごとだが、その感情は当時の感情であると同時に、数十年が経った「現在」でも清算できずにいる「現在」の感情でもある。

チョウをこなごなにする行為は、エミールの標本を台無しにしたことに対する自己処罰でも、チョウの収集に対する未練を絶つためでもない。この行為は、エミールに対する劣等感とやり場のない悔しさの表れである。

同級生で、近所に住み、何かにつけて比較され続け、「僕」自身もライバル視する優等生エミールだが、そんな彼を「僕」はついに超えることはできなかった。彼に謝罪することさえ屈辱なのに、標本を壊した経緯について弁解する機会すら与えられず、彼の軽蔑の目にさらされることとなった。その屈辱は、社会的に成功を収めた現在(第一場面から推測できる)でも癒えぬ、思い出したくない心の傷として今なお息づいている。

第一場面の役割は何か

第一場面は、本来なら語るはずのない心の傷である思い出を語り

せる装置として機能している。また、その心の傷が数十年経った今でも全く癒えていないことを表している。

思い出したくない思い出を「客」が重い口を開いて語るのは、「私」のチョウの収集に対して、十分に見ることもせず、突き返したという大人げない態度をとったため合わせ、あるいはその態度の正当化のための言い訳としてである。

このやり取りがなければ、「客」が思い出を語る第二場面は生まれなかった。

また、回想である第二場面が「現在」の書齋に戻らず、「少年の日」の生々しい描写で終わることで、読者を「僕」||「客」のやり場のない悔しさに感情移入させて、その割り切れない気持ちを共有させるという効果を上げている。

それだけではない。仮に、第三場面として冒頭の書齋に戻る場面を設けて、物語を三場面構成にすると、第二場面を生々しく語っている思い出をいったん終わらせて、「客」と「私」の会話を再開する必要がある。そうすると、「現在」も心の整理がついていない「客」のこの思い出も、他のエピソードと同じように「客」と「私」の会話の中に回収されることになる。しかも、「私」を視点人物とする一人称の語り手であるために、「客」の内面は語られることはない。つまり、「少年の日の思い出」が「現在」も癒えない心の傷であることが表現できない。それでは、不愉快ではあったが他の過去と同様に終わったこと、懐かしい思い出の一つという扱いになってしまふ。三場面構成にすることで、「僕」||「客」における「少年の日の思い出」の意味は異なってしまうのである。

Ⅱ 学習指導の解説

1 指導と評価の計画

〔5時間〕

※太字に重点をおく。

① 指導目標（学習指導要領との対応）

知識及び技能 原因と結果、意見と根拠など情報と情報との関係について理解することができる。(2)ア)

思考・判断・表現等 ① 文章の構成や展開、表現の効果について、根拠を明確にして考えることができる。(C)エ)

思考・判断・表現等 ② 文章を読んで理解したことに基ついて、自分の考えを確かかなものに行うことができる。(C)オ)

学びに向かう力・人間性等 言葉がもつ価値に気づくとともに、進んで読書をし、我が国の言語文化を大切にして、思いや考えを伝え合おうとする。

② 言語活動

小説を読み、考えたことを伝え合う。(C)イ)

③ 評価規準

知識・技能 原因と結果、意見と根拠など情報と情報との関係について理解している。(2)ア)

思考・判断・表現 ① 「読むこと」において、文章の構成や展開、表現の効果について、根拠を明確にして考えている。(C)エ)

思考・判断・表現 ② 「読むこと」において、文章を読んで理解したことに基ついて、自分の考えを確かかなものに行っている。(C)オ)

主体的に学ぶ態度 進んで文章の構成や表現の効果を捉え、学習課題にそつて考えを伝え合おうとしている。

④ 学習指導のアウトライン

時		学習活動の流れ	評価規準
1	<p>◆ 目標を確認し、学習の見通しをもつ。</p> <p>● 本文を通読し、全体の構成を捉える。</p> <p>● 現在の場面と過去の場面に分けて登場人物を書き出し、関係を整理する。</p>	<p>学びの道しるべ 1</p>	<p>*この時間の評価は、第4時と合わせて行う。</p>
2	<p>登場人物の人物像を、描写をもとに捉える。</p> <p>● 「僕」のチョウに対する熱情を読み取る。</p> <p>● 「僕」から見たエミールの人物像を捉える。</p>	<p>学びの道しるべ 2</p>	<p>*この時間の評価は、第4時と合わせて行う。</p>
3	<p>登場人物の心情の変化を、描写をもとに捉える。</p> <p>● 場面ごとに「僕」の心情を読み取る。</p> <p>● 場面の展開にそって、「僕」の心情の変化を捉える。</p>	<p>学びの道しるべ 3</p>	<p>*この時間の評価は、第4時と合わせて行う。</p>
4	<p>登場人物の言動の意味を、語りや描写をもとに捉える。</p> <p>● 最終場面の描写から、「僕」の行為の意味を考える。</p> <p>● 「僕」の行為の意味について、考えたことを共有する。</p>	<p>学びの道しるべ 4</p>	<p>知識・技能 (2)ア 記述の確認</p> <p>思考・判断・表現 ① Cエ 発言の観察</p>
5	<p>語り手の視点を捉え、表現の効果について考える。</p> <p>● エミールの人物像を自分の視点から捉え直す。</p> <p>● 現在の場面が果たす役割を捉え、表現の効果について考える。</p> <p>◆ 目標をもう一度確認し、学んだことを自分の言葉でまとめる。</p>	<p>学びの道しるべ 5</p> <p>↓ 読み方を学ぼう</p> <p>学びの道しるべ 6</p> <p>語り手・視点</p>	<p>思考・判断・表現 ② Cオ 記述の確認</p> <p>主体的学習に取り組む態度 行動の観察</p>

2 学習活動の展開例

〔5時間〕

学習活動

発問・生徒反応例・留意点

学習内容に即した確認と支援

学習指導の
展開例別案



第1時 「本時の学習 過去を回想する構成と登場人物の相互関係を捉える。」

1 学習の見通しをもつ。

◆目標を確認し、学習の見通しをもたせる。



教科書に示した目標

◎過去を回想する構成や語り手の視点を捉え、表現の効果について考える。

◎登場人物の行動や心情について、自分の考えを確かなものにする。

学習指導要領
との対応

↓C工

↓C才



CD 朗読CDの場合、朗読時間26分34秒。

3 全体の構成を捉える。

○P 208の一行空きを挟み、時間と場所が変わっていることをおさえ、全体を大きく二つの場面に分けさせる。

○前半に現在のできごと、後半に過去のできごとが描かれていることを捉えさせる。

○現在の場面と過去の場面とで、視点が変わっていることをおさえさせる。このときに、P 220「読み方を学ぼう」8「語り手・視点」を参考にしてもよい。

支援 漢字の読みに困難のある学習者には総ルビPDFを活用するとよい。

確認 全体を現在の場面と過去の場面の二つに分けている。

支援 現在の場面の「私」と「客」、過去の場面の「僕」の年齢に着目させる。

第2時「本時の学習 登場人物の人物像を、描写をもとに捉える。」

1 「僕」のチョウウに対する熱情を読み取る。

- 「二年たって」(P 210・L 18)の前までの過去の場面 (P 208・L 8～P 210・L 17) から、「僕」がチョウウ集めに熱中している様子がわかる表現を探させる。
- 特に、P 208・L 8～P 209・L 11の描写をもとに、チョウウ集めに熱中すると他のことは全て放置してしまうという「僕」の性格をおさえさせる。

2 「僕」がエーミールをどう思っているか、まとめる。

学びの進めるへ

生徒反応例

- 非の打ちどころがないという悪徳をもっていた。(P 210・L 5)
 - 子供としては二倍も気味悪い性質だった。(P 210・L 6)
 - 非常に難しい珍しい技術を心得ていた。(P 210・L 8)
 - あらゆる点で、模範少年だった。(P 210・L 9)
 - 僕は妬み、嘆賞しながら彼を憎んでいた。(P 210・L 10)
 - こっぴどい批評家 (P 210・L 15)
- 「それは、中庭の向こうに住んでいる……嘆賞しながら彼を憎んでいた。」(P 210・L 4～10) という部分が、「僕」がエーミールについて直接語っている部分である。

確認 「僕」のチョウウに対する熱情を読み取っている。

支援 P 208・L 8～P 209・L 11に着目させる。

確認 「僕」から見たエーミールの人物像を捉えている。

支援 ワークシートの空欄部分を本文から探させる。

210 ページ・11行～17行	210 ページ・4行～10行
<p>少年の日の思い出</p> <p>「二年たって」二年前の夏、僕はチョウウ集めに熱中していた。...</p>	<p>「僕」は、エーミールをどのよう人物だと捉えていますか。それがわかるところを、「二年たって」の前までの過去の場面から抜き出しましょう。</p>
<p>● 「僕」は、エーミールをどのよう人物だと捉えていますか。それがわかるところを、「二年たって」の前までの過去の場面から抜き出しましょう。</p>	<p>● 「僕」は、エーミールをどのよう人物だと捉えていますか。それがわかるところを、「二年たって」の前までの過去の場面から抜き出しましょう。</p>

この時間の評価

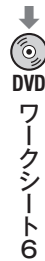
*第4時と合わせて行う。

3 学習を振り返り、次時の見通しをもつ。

○その直後のコマラサキを鑑定される場面（P 210・L 11～17）でも、「僕」のイーミールに対する思いが表れている。

○それらの全文をあげてもよいが、「僕」のイーミールに対する思いが特に強く表れている言葉を探したい。

○ワークシートを活用して、空欄を埋めるかたちで考えさせてもよい。



○そこから、「妬み」「嘆賞」「憎む」という複雑な感情を同時にもっていることを捉え、「僕」とイーミールが対照的な人物として描かれていることに注目させる。

○あくまでも、「僕」の目を通して描かれた人物像であることをおさえさせる。

◇今回は、描写をもとに登場人物の人物像を捉えたことを確認させる。

◇次回は、「僕」の心情の変化を読み取ることを伝える。

●この授業は、単に描写を鑑定し、感情を捉えるだけでなく、あらゆるところで登場人物の心情を読み取るという性質をもっている。●また、この授業は、単に描写を鑑定するだけでなく、登場人物の心情を読み取るという性質をもっている。●また、この授業は、単に描写を鑑定するだけでなく、登場人物の心情を読み取るという性質をもっている。

第3時「本時の学習」登場人物の心情の変化を、描写をもとに捉える。

1 場面ごとに「僕」の心情を表す描写を探す。

学びの道しるべ 3

発問 「二年たって」(P.210・L.18) から終わりまでの、「僕」の心情が語られている表現について、場面ごとに探しましょう。

○ 次のように場面を分けて考えさせる。

- ① クジャクヤママユのうわさを聞いたとき。
- ② エーミールの家に入ってからクジャクヤママユを盗んで戻すまで。
- ③ 家に帰ってから謝りに出かけるまで。
- ④ エーミールに謝ってから立ち去るまで。

○ ②は、さらに、次のように細かく分けて提示してもよい。

- 欲望を感じて盗むまで
 - 階段を下りるとき
 - 盗んだ直後
 - 潰れたチョウを見たとき
- ワークシートを活用して、表の形にまとめさせてもよい。

↓
DVD
ワークシート7

2 場面の展開にそって、「僕」の心情の変化を捉える。

学びの道しるべ 3

発問 場面ごとの描写から、「僕」のどのような心情の変化が読み取れるでしょうか。

生徒反応例

- ① クジャクヤママユのうわさを聞いたとき
 - 熱烈に欲しがったクジャクヤママユをかえしたと聞き、興奮が頂点に達している。
 - チョウを今すぐ見たいと感情が高ぶっている。
- ② エーミールの家に入ってからクジャクヤママユを盗んで戻すまで。

確認 「僕」の心情の変化を捉えている。

支援 それぞれの場面から心情がわかる言葉を探させる。

この時間の評価

* 第4時と合わせて行う。

3 学習を振り返り、次時の見通しをもつ。

● 欲望を感じて盗むまで……美しいクジャクヤママユを自分のものにした。

● 盗んだ直後……チョウを手に入れた喜びに満たされている。

● 階段を下りるとき……罪を犯してしまったことを自覚して我に返り、自分が卑しく、恥ずべき人間だと感じている。

● 潰れたチョウを見たとき……クジャクヤママユを潰すという取り返しのつかないことをしてしまい、後悔している。

③ 家に帰ってから謝りに出かけるまで。

● どうせ理解してもらえないとわかっている相手（エーミール）に謝罪しに行く勇気が出ないでいる。

④ エーミールに謝ってから立ち去るまで。

● 謝っても許してもらえないばかりか、プライドが傷つけられ、怒りがこみあげている。

○ はじめからクジャクヤママユを盗むつもりでいたわけではなく、その美しさのみせられてのことであり、もちろん壊すつもりなどなかったという「僕」の純粋で幼い心の動きを時系列で追い、それがエーミールにはわかってもらえないことのやりきれなさや絶望感を捉えさせる。

◇ 今回は、「僕」の心情の変化を捉えたことを確認させる。

◇ 次回は、最終場面の「僕」の行為の意味について考えることを伝える。

第4時「本時の学習」登場人物の言動の意味を、語りや描写をもとに捉える。

1 最終場面の描写から、

「僕」の行為の意味を考
える。

学びの通しるべ 4

発問 なぜ「僕」は、「チョウを一つ一つ取り出し、指でこなごなに押し潰してしまった」(P 216・L 8) のでしょうか。

生徒反応例

- 美しいクジャクヤママユを壊してしまった自分自身に罰を与えようとしているから。
- 熱情を注いだチョウ収集をやめるといふ強い意志の表れだと思う。
- プライドを傷つけられたことへの怒りが、エーミールでなくチョウに向けられているから。
- エーミールのクジャクヤママユが壊れてしまったように、「僕」も自分の宝物を壊してエーミールと同じ思いをすることで、犯した罪から逃れようとしているから。
- これまでに捉えてきた、「僕」のチョウへの思いや、エーミールへの思いを根拠にして考えさせる。

○ P 218「思考の方法」を用い、「もし、箱ごとまとめて捨てていたら」「もし、そのまま持っていたとしたら」など、別の行動をとったと仮定して、「一つ一つ取り出し、指でこなごなに押し潰してしまった」という行為と受ける印象の違いを考えると、この行動の意味を捉えやすくなる。

↓ DVD ワークシート 8

確認 「僕」の行為の意味について、自分の考えをもっている。

支援 ワークシートを用いて「思考の方法」を活用して考えさせる。

支援 ワークシートの「思考の方法」がうまく活用できていない学習者に対しては、まず、「僕」の行為に共感できるか、できないかという二択で考えさせるとよい。

2 「僕」の行為の意味について、考えたことを共有する。

【学びの道しるべ】4

○「自分が犯した罪の償いのために潰した」という考えが出ることも予想されるが、その場合には、「そのとき初めて僕は、一度起きたことはもう償いのできないものだということを悟った」(P 216・L 4)のが、チヨウを潰す前であることを確認し、償うことはできないと悟ったにもかかわらず「僕」がチヨウを潰した意味をさらに考えさせたい。

○それぞれ次のような発言例以外にも、多様な意見が想定される。

- 共感するところ……「あいつの喉笛に飛びかかるところだった」(同じように怒りやいらだちを感じると思う。)
- 共感できないところ……「説明しようと試みた」(まず、正直に謝罪をするべきだった。)
- 疑問に思うところ……「僕は彼に僕のおもちゃをみんなやると言った」(「宝物」を壊されたエーミールに対して、なぜおもちゃをあげることで許してもらおうと思ったのか。)

○共感できないところ、疑問に思ったことに対する学習者の発言をもとに、クジヤクヤママユを壊されたエーミールの言動についても考えさせ、次時の学習につなげたい。

3 本時の学習を振り返り、

次時の見通しをもつ。

◇今回は、「僕」の行為の意味について学習したことを確認する。
◇次回は、この作品における表現の特徴や工夫を捉え、その効果について考えることを伝える。

この時間の評価

知識・技能

原因と結果、意見と根拠など情報と情報との関係について理解している。(2)ア

【記述の確認】

思考・判断・表現

①「読むこと」において、「文章の構成や展開、表現の効果について、根拠を明確にして考えている。(C)エ

【発言の観察】

第5時「本時の学習」語り手の視点を捉え、表現の効果について考える。

1 エーミールの心情を想像する。

2 自分はエーミールをどう思うか、まとめる。

【学びの道しるべ5】

↓読み方を学ぼう

○壊れたクジヤクヤママユを見つけてから、「僕」の謝罪を聞くまでのエーミールの心情を、描かれた行動や態度をもとに想像させる。

発問 あなたは、エーミールをどのように思いますか。

生徒反応例

● エーミールに非はないのに悪者のように描かれていることに疑問を感じる。

● 本当は大切なチョウを壊された怒りをぶつけないはずなのに、精いっぱい自分を抑えているエーミールは、単に冷淡なだけではないと思う。

● 謝罪を受け入れず、「僕」をただ軽蔑し続けるエーミールこそが悪漢だと思う。

● 必死に謝っている「僕」を受け入れないエーミールは、他人と人間関係を築くことができない非人間的な人物だ。

○過去の場面は、「僕」の視点で描かれているため、どうしてもエーミールが悪く受け取られがちであるが、「僕」の行動は許しがたいものであると考えたエーミールの心情にも思いを巡らせたい。

○もし過去の場面がエーミールの視点で描かれていたとしたらどのような物語になるかを考えることも、エーミールという人物を捉え直すことにつながる。

○「僕」のチョウ集めに対する熱情とエーミールのチョウを扱う正確さや技術の高さが対照的に描かれている点や、エーミールの技術につい

確認 エーミールの人物像を自分の視点から捉え直している。

支援 「僕」とエーミールの両方の心情をもとに、どちらに共感するかを考えさせる。

この時間の評価

思考判断・表現 ② 「読むこと」

「読むこと」において、文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えを確かなものに行っている。(Cオ)

主体的に着目し観察

記述の確認

3 現在の場面が果たす役割について考え、話し合う。

学びの進めるべし

では、「僕」も嘆賞していたことを視野に入れて考えさせる。
 ○ワークシートを活用して、エーミールの心情を想像させたくえで、「僕」とエーミールのどちらに共感するかを表明させてからまとめさせてもよい。

↓ DVD ワークシート9

発問 現在の場面は、どのような役割を果たしているでしょうか。

○現在の場面がなく、「僕は、八つか九つするとき……」(P 208・L 8)の箇所から物語が始まっていたとしたら、作品の印象はどのように違うかを想像させるとよい。

○現在の場面に描かれている「闇」の描写がどのようなものを暗示していたか、チョウを見たとときの「客」の言動からどのような心情を読み取ったかを想起し、過去の場面との共通点を探すことで考えさせる。

○ワークシートを活用して、現在の場面の描写を抜き出し、そのイメージを思い起こさせるかたちで考えさせてもよい。

↓ DVD ワークシート10

4 学習を振り返る。

◇今回は、表現の効果について考えたことを確認させる。

◆学習目標をもう一度確認し、学習全体を通してできるようになったこと、わかったこと、今後に生かせそうなことを自分の言葉でまとめさせる。

↓ DVD ワークシート10

確認 現在の場面が果たす役割を捉え、表現の効果について自分の考えをもつて。

支援 現在の場面の情景描写や、視点の変化に着目させる。

3 学びの道しるべの解説

構造や内容を捉える

1 現在の場面（はじめ～208ページ・7行め）、過去の場面（208ページ・8行め～終わり）について、それぞれ登場人物を書き出し、その関係を整理しよう。

課題設定の意図

場面ごとに登場人物を確認し、人物相関図に表すなどして関係を整理することで、作品の全体像や展開のしくみを捉えやすくする。

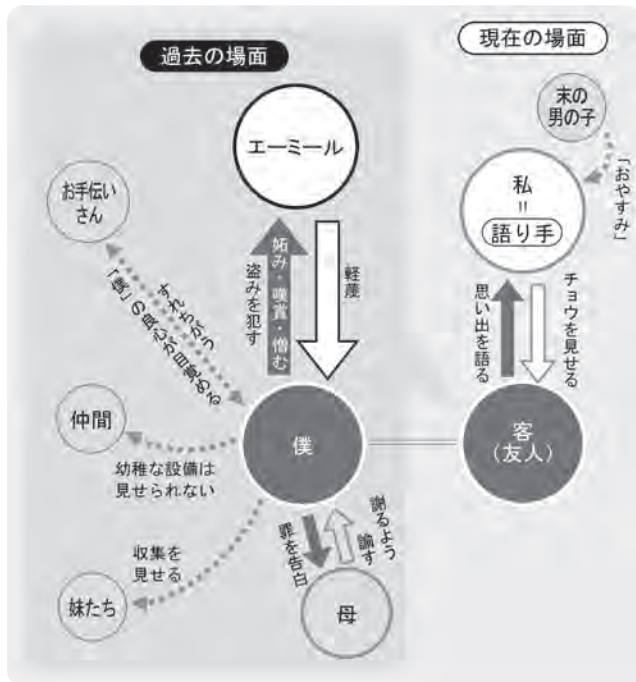
解答例

〔現在の場面〕

- 私⇨子供が生まれて幼年時代の楽しみを思い出し、一年前から再びチヨウ集めをしている。
- 客⇨「私」の友人。少年の頃は熱情的なチヨウの収集家だった。
- 末の男の子⇨「私」の子供。この末の男の子がきっかけとなって、幼年時代の思い出の話が始まる。

〔過去の場面〕

- 僕⇨熱情的なチヨウの収集家だったが、盗みを犯した事件をきっかけに、集めたチヨウをすべてこなごなに押し潰してしまふ。現在の場面で「客」として登場した人物が、「僕」として過去の思い出を語っている。
- エーミール⇨「僕」の家の中庭の向こうに住む先生の息子。非の打ちどころがなく、あらゆる点で模範少年。



- 仲間⇨「僕」のチヨウ集めの仲間。はじめは彼らに収集したチヨウを見せていたが、「僕」とは異なりぜいたくな道具を持っていたため、自慢することができなくなった。
- 妹たち⇨「僕」の妹たち。「僕」が仲間に見せなくなったチヨウの収集を見せている。
- お手伝いさん⇨エーミールの家に仕える。クジヤクヤママユを持ち出して部屋を去る「僕」と階段ですれちがう。それがきっかけとなって「僕」の良心が目覚める。
- 母⇨「僕」の母。「僕」の罪の告白を受け止め、エーミールに謝罪するよう諭す。

ポイント

○ P 208の一行空きを挟み、時間と場所が変わっていることをおさえ、前半の現在の場面と後半の過去の場面とで、視点が変わっていることに気づかせる。

○ このときに、P 220「読み方を学ぼう⑧ 語り手・視点」を参考にしてもよい。

○ 現在の場面の「客」と過去の場面の「僕」が同一人物であることをおさえさせ、過去の場面が、現在の場面が登場した「客」が語った思い出であることを捉えさせる。

○ 題名の「少年の日の思い出」は誰の思い出であるかを問いかけると考えやすい。

○ 登場人物の相互関係を人物相関図に整理する場合は、P 78「読み方を学ぼう② 人物相関図」で学習した、次のような手順を再度確認させ、それらを生かして工夫して作図させる。

- 主人公を中央に大きく書く。
- 登場人物を書き出していく。
- 主人公との関係を矢印や線で表し、その大小、形、色などを工夫する。

● 「仲間」「ライバル」など、主人公との関係を言葉で表す。

○ ワークシートを活用して、空欄部分を考えさせるかたちで整理してもよい。↓  ワークシート5

○ オリジナルの人物相関図を作成した場合は、自分の図解の工夫点や、他の人の図解についての感想・疑問点などを交流させ、人物の関係についての理解を深めさせたい。

2 「二年たって」(210ページ・18行め)の前までの過去の場面

(208ページ・8行め) 210ページ・17行め) から、「僕」が「エミール」について語っている言葉を抜き出し、「僕」が「エミール」をどう思っているか、まとめよう。

課題設定の意図

事件を起こす前、「エミール」が「僕」にとってどんな存在だったのかを捉える。この思いが、このあとの「僕」の心情や行動を考えるうえで重要な手がかりとなる。

解答例


「抜き出し」

- 非の打ちどころがないという悪徳をもっていた。(P 210・L 5)
 - 子供としては二倍も気味悪い性質だった。(P 210・L 6)
 - 非常に難しい珍しい技術を心得ていた。(P 210・L 9)
 - あらゆる点で、模範少年だった。(P 210・L 9)
 - 僕は妬み、嘆賞しながら彼を憎んでいた。(P 210・L 10)
 - こっぴどい批評家 (P 210・L 15)
- 「僕」が「エミール」をどう思っているか

● チョウの収集や修復に関する知識、技術は確かなものだと思いつつも、あらゆる点で模範少年であることを不快に思い、専門家気取りで批評するような性格を憎らしく思っている。

● 非の打ちどころがなく、チョウの収集についても多くの知識や技術をもつエミールがうらやましいが、自分もっていないものを手にしている完璧な点を憎らしく思っている。

ポイント

- 「それは、中庭の向こうに住んでいる……嘆賞しながら彼を憎んでいた。」(P 210・L 4～10)という部分が、「僕」がエーミールについて直接語っている部分である。
- その直後のコムラサキを鑑定される場面(P 210・L 11～17)でも、「僕」のエーミールに対する思いが表れている。
- それらの全文をあげてもよいが、「僕」のエーミールに対する思いが特に強く表れている言葉を探したい。
- ワークシートを活用して、空欄を埋めるかたちで考えさせてもよい。
 **ワークシート6**
- そこから、「妬み」「嘆賞」「憎む」という複雑な感情を同時にもっていることを捉え、「僕」とエーミールが対照的な人物として描かれていることに注目させる。
- あくまでも、「僕」の目を通して描かれた人物像であることをおさえさせる。

読みを深める

- 3** 「二年たって」から終わりまでの、「僕」の心情が語られている表現に着目して、「僕」の心情の変化を捉えよう。

課題設定の意図

物語は、クジャクヤママユの登場によって急速に流れだし、クライマックスへと一気に突き進む。時系列にそって心情を追いかけることで、最終場面の行動に至るまでの「僕」の心の動きを把握する。

解答例

表現	心情
僕の熱情はまだ絶頂にあった。(P 210・L 18)	チョウウ収集に飽きることなく、いまだに没頭している。
そのときほど僕は興奮しないだろう。(P 211・L 3)	熱烈に欲しかったクジャクヤママユをエーミールがさなぎからかえしたと聞き、興奮が頂点に達している。
僕はすっかり興奮してしまつて、それが見られるときの来るのが待ちきれなくなった。(P 211・L 12)	クジャクヤママユを今すぐにでも見たいと感情が高ぶっている。
せて例のチョウウを見たい(P 212・L 1)	エーミールは家にいないが、せっかく来たのだから、クジャクヤママユを見て帰りたいという思いが高まっている。
この宝を手に入れたい(P 212・L 11)	美しいクジャクヤママユを自分のものにしたいという欲望が抑えきれなくなった。
大きな満足感のほか何も感じていなかった。(P 213・L 1)	クジャクヤママユを手に入れた喜びに満たされている。
良心は目覚めた。(P 213・L 4)	罪を犯してしまったことを自覚して我に返り、自分が卑しく、恥ずべき人間だと感じている。
自分は盗みをした、下劣なやつだということを悟つた。(P 213・L 4)	

<p>恐ろしい不安に襲われて (P 213・L 5)</p>	<p>冷たい気持ちに震えていた。 (P 213・L 7)</p>	<p>びくびくしながら……自分自身におびえながら(P 213・L 8)</p>	<p>僕はもうどんな不幸が起こったかということを知った。そして泣かんばかりだった。 (P 213・L 16)</p>	<p>盗みをしたという気持ちより……僕の心を苦しめた。 (P 214・L 2)</p>	<p>悲しい気持ち (P 214・L 7)</p>	<p>僕は出かける気になれなかった。 (P 214・L 17)</p>	<p>あいつの喉笛に飛びかかるところだった。 (P 215・L 18)</p>	<p>一度起きたことは、もう償いのできないものだということ悟った。 (P 216・L 4)</p>
<p>自分の犯した罪が周りに知られてしまうのではないかと、極端に恐れている。</p>		<p>クジャクヤママユを潰すという取り返しのつかないことをしてしまい、後悔している。</p>		<p>盗みを犯しただけでなく、クジャクヤママユを修復できないほどに壊してしまい、途方に暮れている。</p>		<p>どうせ理解してもらえないとわかっている相手に謝罪しに行く勇氣が出ないでいる。</p>		<p>必死に謝っているのに、許してもらえないばかりか、プライドを傷つけられ、怒りがこみあげている。もう何を言っても無駄だと諦め、絶望している。</p>

ポイント

- クジャクヤママユのうわさを聞いたとき、エーミールの家に入ってからクジャクヤママユを盗んで戻すまで、家に帰ってから謝りに出かけるまで、エーミールに謝ってから立ち去るまで、という四つの場面に分けて考えさせる。エーミールの家に入ってからクジャクヤママユを盗んで戻すまでの場面は、欲望を感じて盗むまで、盗んだ直後、階段を下りるとき、潰れたチョウを見たときと、学習状況に応じてさらに、細かく分けて提示してもよい。
- ワークシートを活用して、表の形にまとめてさせてもよい。ただし、必ずしも解答例のように一つ一つの表現を抜き出してその心情を解釈する必要はない。↓ DVD ワークシート7
- はじめからクジャクヤママユを盗むつもりでいたわけではなく、その美しさにみせられてのことであり、もちろん壊すつもりもなかったという「僕」の純粹で幼い心の動きを時系列で追い、それがエーミールにはわかってもらえない絶望感を捉えさせる。
- 盗むという行為を「下劣な」「恥ずべきこと」だと思い、クジャクヤママユを壊してしまったことを後悔する気持ちはあるものの、エーミールに対する謝罪の気持ちはほとんど書かれていない(「エーミールに謝罪した」という類の記述がない)ことにも気づかせたい。そのことが、最終場面での「僕」の心情を考えるうえでもっとも重要となる。「それは僕がやったのだと言い、詳しく話し、説明しようとした」(P 215・L 8)や「僕は悪漢だということに決まってしまう」(P 216・L 1)などの表現にも着目させたい。

○この段階で、「チョウを一つ一つ取り出し、指でこなごなに押し

潰してしまった」という表現をあげ、心情を捉えようとする生徒もいるだろう。その場合は、課題4に自然と移行してかまわない。

4 「そしてチョウを一つ一つ取り出し、指でこなごなに押し潰してしまった」(216ページ・8行め) ことは、「僕」にとってどのような意味をもつ行為だろうか。考えを発表し合おう。

↓思考 ◆仮定する

課題設定の意図

熱情を注ぎ、大切に保存してきたチョウを自ら手でこなごなに押し潰すという驚くべき行為の裏にある、「僕」の心情の激しさを読み取る課題である。読者によつて「僕」の心情はさまざまに想像でき、その行為の意味づけもさまざまであろう。「僕」の心情の変化を捉える3での学習をふまえて、他の生徒と考えを交流することで、一人一人の読みを深めさせたい。

解答例

●「僕」は自分の犯した罪の重さを自覚し、宝物であるチョウを指で潰すことで、自らに罰を与えようとしているのだと思う。もし、チョウを捨てずにそのまま持っていたとしたら、「僕」の謝罪は表面的な軽いものになってしまう。盗みを犯しただけでなく、美しいチョウを傷つけてしまったことに対する罪の意識が、自身の収集をこなごなにするという行為に表れている。

●一つ一つ指でこなごなに押し潰す行為は、「僕」のチョウ収集をやめようという強い意志の表れだと思う。ここでもし、箱ごとまとめて捨てていたら、一匹一匹のチョウへの強い思いがあまり感

じられなくなる。思い出が詰まっているチョウと向き合い、一つ潰していくからこそ、熱情を注いだチョウの収集と決別しようという思いが感じられる。


●「僕」は、エーミールの発言によつてチョウ収集に対するプライドが傷つけられた。「すんでのところであいつの喉笛に飛びかかる場所だった」とあるように、怒りがこみあげていることがわかる。エーミールに対する怒りが、エーミールではなく、宝物であるチョウに向けられているのだと思う。「一つ一つ取り出し、指でこなごなにする」という行為は、「僕」の強い怒りが感じられる。

●クジャクヤママユを盗み、壊してしまったことをエーミールに許してもらえなかった「僕」は、クジャクヤママユを壊してしまったときのように自分の宝物のチョウを壊し、エーミールと同じ思いをすることで、自らの犯した罪から逃れようとしたのだと思う。「チョウを一つ一つ取り出し、指でこなごなに押し潰す」という行為には、「僕」のチョウへの執着が感じられる。

ポイント

○考えの根拠を本文の中から探すことが重要である。「僕」のチョウへの思いや、エーミールへの思いが複雑に絡み合つて、この行動が引き起こされている。「盗みをしたという気持ちより、自分が潰してしまった美しい珍しいチョウを見ているほうが、僕のことを苦しめた」(P 214・L2)と感じるほどチョウを愛している「僕」が、大切にしてきたチョウを自分の指で潰すことの意味を、これまで追ってきた「僕」の心の動きをもとに考える。

○一つめ・二つめの解答例は、P 218の「思考の方法」に示されている

る方略を活用し、「もし、そのまま持っていたとしたら……。」も
し、箱ごとまとめて捨てていたら……。』と仮定して、「一つ一つ
取り出し、指でこなごなに押し潰してしまった」という行為と受
ける印象の違いを考えることで、この行動の意味を捉えようとし
ている。ワークシートを活用して、この「思考の方法」を用いて
考えさせてもよい。↓ DVD ワークシート 8

○三つめ・四つめの解答例は、「チョウを一つ一つ取り出し、指で
こなごなに押し潰す」という行為の解釈の違いを示したものであ
る。「エーミールに対してわき上がる怒りや憎しみ、悔しさをチョ
ウにぶつけている」という解答（三つめ）は、「すんでのところ
であいつの喉笛に飛びかかるところだった」（P 215・L 18）とい
う記述を手がかりに、エーミールに対する「僕」の感情の高ぶり、
怒りの激しさや憎しみの深さが表れており、比較的思考しやすいだ
ろう。

○「自分が犯した罪の償いのために潰した」という考えが出ること
も予想されるが、その場合には、「そのとき初めて僕は、一度起
きたことは、もう償いのできないものだということを知った」（P
216・L 4）のが、チョウを潰す前であることを確認し、償うこと
はできないと悟ったにもかかわらずチョウを潰した意味をさらに
考えさせたい。

自分の考えを深める

5 あなたは、「エーミール」についてどのように思うか、ま
めよう。

↓ 読み方を学ぼう 語り手・視点

課題設定の意図

読者は、「僕」の視点で描かれた「エーミール」を見ている。そ
のため、「僕」の心情に寄り添いながら、「エーミール」という人物
を捉えてきた。この課題では、「僕」と「エーミール」を読者の視
点から対象化することで、一人一人が自分の考えを形成し、作品を
多角的に捉えることをねらいとしている。

解答例

●私は、エーミールに非はないのに悪者のように描かれていること
に疑問を感じた。一連のできごとは「僕」が盗みを犯したことが
原因であり、クジャクヤママユが潰れて悲しいのは、「僕」より
もエーミールのはずだ。「僕」は罪を認め謝罪をしてはいるが、
自分のしたことを正当化し、エーミールを悪人に仕立てようとし
ているように見えた。

●私は、エーミールは模範少年を装った悪漢だと思う。「僕」がエー
ミールへ謝罪をし、自分のチョウの収集を全部やると言ったのに
対し、「僕は君の集めたやつはもう知っている」と言った。「僕」
は二年前にコムラサキを見せたとき、エーミールには一度も収集
を見せていない。その間に収集は増えているはずなのに、「全部
知っている」と言うのは、「僕」を正當に評価しようとせず、は
じめから自分より劣っていると決めつけているからである。謝罪
を受け入れず、「僕」をただ軽蔑し続けるエーミールこそが悪漢
だと思う。

●私は、エーミールはこの物語の中で、「僕」以上に傷ついた人物
だと考えた。自分でさなぎからかえしたクジャクヤママユを壊さ
れたときの悲しみは計りしれない。そして、大切なチョウを壊さ

れたにもかかわらず、「僕」に「おもちゃをみんなやる」と言われたときに、チョウ収集に対するプライドが傷つけられたはずだ。エーミールは、クジャクヤママユをだいなしにした張本人を目の前に冷静に対応したと思う。

ポイント

○過去の場面は、「僕」の視点で描かれているため、どうしてもエーミールが悪く受け取られがちであるが、「僕」の行動は許しがたいものであると考えたエーミールの心情にも思いを巡らせたい。

○チョウ収集に「僕」と同等もしくはそれ以上に熱を注いでいるエーミールに、「僕」は「おもちゃをみんなやる」と言ったこと、「詳しく話し、説明しようと試みた」とあるが、「謝罪した」とは書かれていない点にも注目したい。

○「僕」のチョウ集めに対する熱情とエーミールのチョウを扱う正確さが対照的に描かれている点や、エーミールの技術の高さについては「僕」も嘆賞していたことを視野に入れて考えさせる。

○ワークシートを活用して、エーミールの心情を想像させたいので、「僕」とエーミールのどちらに共感するかを表明させてからまとめさせてもよい。



↓ 読み方を学ぼう 8 語り手・視点

前半部分（現在の場面）と後半部分（過去の場面）では視点が違っている。ここが捉えられていないと、本文を豊かに読み進めることはできない。学習の冒頭、課題1でつかませたおきたい。現在の場面では「私」という言葉が使われているのに対し、過去の場面では「僕」という言葉が使われている。この点に着目させると、視点が違うことや、一方が大人で一方が子供であることも理解しやすい。

そのうえで、視点が変わるのが、物語にどんな効果を与えているかを考えさせたい。その際、もし過去の場面も「私」が「僕」から聞いた話を伝えるという設定であったら、どんな印象を受けるかを想像させてもよいだろう。また、過去の場面がエーミールの視点で描かれていたとしたらどのような物語になるかを考えることも、エーミールという人物を捉え直し、表現の効果を考えることにつながる。

↓ 別冊「読み方を学ぼう」活用ガイド P46 参照

6 現在の場面は、この作品においてどのような役割を果たしているだろうか。考えたことを話し合おう。

課題設定の意図

これまで過去の場面について読みを深めてきたことをふまえて、再び現在の場面に向け、作者の表現の工夫を読み取る。過去の

場面の伏線としての役割や、視点の変化による効果について考えさせたい。

解答例

●現在の場面では、昼間の明るさが徐々に消えていき、外の景色が闇に沈む情景が描かれている。また、チョウを見せられた「客」は、不愉快であるかのような態度で箱の蓋を閉じている。これらことから、これから展開する物語が暗くつらいものであることが予想できる。現在の場面には、過去の場面の結末を暗示する伏線としての役割がある。

●現在は大人になった「客」が、チョウを見て不愉快でもあるかのような態度をとり、「話すのも恥ずかしい」と言っている。このような記述によって、少年の日の思い出が単なる過去の話ではなく、長い年月を経た現在でも心に暗い影を残しているできごとだということがわかる。

ポイント

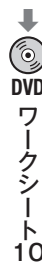
○この作品の中心は、内容的にも分量的にも、過去の場面にあることとは明らかである。そこで、作品全体を通して登場人物の相互関係や心情を読み取ったうえで、改めて冒頭の現在の場面に立ち返る。なぜ現在の場面から始まっているのかを考えることによって、その役割や効果を捉えることができるだろう。

○現在の場面がなく、「僕は、八つか九つのとき……」（P.208・L.8）から物語が始まっていたとしたら、作品の印象はどのように違うかを想像させるとよい。

○場合によっては、現在の場面は必要かどうかという議論を展開することも考えられる。

○現在の場面に描かれている「闇」の描写がどのようなものを暗示していたか、チョウを見たときの「客」の言動からどのような心情を読み取ったかを想起し、過去の場面と共通する点を探すことで、過去の場面の結末を暗示する伏線となっていることに気づかせたい。

○ワークシートを活用して、現在の場面の描写を抜き出し、そのイメージを思い起こさせるかたちで考えさせてもよい。



○過去の場面から現在の場面に戻り、物語が幕を閉じる構成になっていた場合、作品に対してどのような印象をもつか考えさせたい。本課題と関連させて「学びを広げる」に取り組んでもよいだろう。

学びを振り返る

□ 「少年の日の思い出」での学習を通して、学んだことを自分の言葉でまとめよう。

🔄 振り返りのキーワード 語り手の視点・自分の考え

課題設定の意図

目標をふまえたキーワードを観点に学習を振り返り、自分の言葉でまとめることを通して、学んだことを意識化させ、今後の学習や読書で活用できるようにする。

解答例

●「少年の日の思い出」で「語り手・視点」について学び、同じ物語でも、語り手の視点からエーミールや「僕」の母などの別の登場人物へ視点を変えると、全く違う見方・感じ方ができることを

知った。また、場面ごとに「僕」の心情を読み取っていくことで、チョウ収集のとりこになった「僕」がチョウを潰すまでの心情の変化を捉えることができた。

- 回想に入ったまま現在に戻ってこない、という語りの構造から、もう大人になっている「客」の内面に、今も少年の頃の悲しみや痛みがなまなましく残っていることが想像できた。物語の展開だけでなく、小説がどんなかたちで書かれているかによって、登場人物の明記されていない心情を推測したり、読み取ったり、また、それらをもとに自分の考えを深めていくことができた。

ポイント

- 内容面の振り返りに留まることなく、「語り手・視点」、「自分の考え」という本教材の中心的な目標を意識化してまとめさせる。
- ただし、これらの言葉を全て使わなければいけないというわけではない。これらの中から、自分が今後の学習や読書に最も生かせそうだと感じたものにしぼってもよい。
- その際、単に「視点の変化を捉えることができた」などのできるようになったことやわかったことだけでなく、どのような学習を通してそれが身についたかということ、具体的にまとめさせた。

学びを広げる

この話をうち明けられた「私」は、「客」にどのような言葉を返すだろうか。想像したことを発表し合おう。

課題設定の意図

現在の場面の間に過去の回想の場面を挿入する「現在—過去—現在」という額縁構造の作品は多いが、この作品は「現在—過去」で終わっている。そこで、過去の場面のもとに再び現在の場面に戻った場合の登場人物の会話を考えることで、作品の構造をより深く捉えることができる。また、作品中ではほとんどふれられていない「私」の心情を考えることにつながり、さらに内容理解を深めることができる。

解答例

- 自分自身が犯した罪について話すということはかなりつらかったはずだ。話してくれてありがとう。君はそれ以来まだ自分を許せてはいないんだね。そろそろ自分自身を許してあげたらどうだい。
- 君にそんなつらい過去があったとは知らなかった。しかし、君は今でもチョウ集めに魅了されているのではないかな。本当はもっと、チョウを捕るときのあの緊張と歓喜を味わいたかっただろう。つらい思い出は忘れて、私と一緒に、もう一度チョウ集めをやってみないか。
- 少年の日は楽しかったけれど、誰にでもつらい思い出の一つや二つ、あるものだ。実は、私にもこんな思い出があるんだ。(と言って、今度は「私」が思い出を語り出す。)

ポイント

- 「妙なものだ。チョウを見るくらい、幼年時代の思い出を強くそえられるものはない。」(P 207・L 8) という言葉から、「客」は今でもこの思い出に強く心をとらわれていることを理解する。
- そのうえで、「私」も「客」も大人になっており、当時の「僕」

には気づかなかったことや、新たな考え・視野をもっている可能性を意識して考える。



語彙を豊かに

断りを表す表現

「けっこう」は、「もう十分で、これ以上はいらない」という意味で、丁寧に断るときに使う言葉であり、作品中に二度使われている。

冒頭の現在の場面では、「客」が「もう、けっこう。」(P 207・L13)と言ってチョウを見るのをやめている。これは、口早に言い放っていることから、「客」にとつてチョウを直視し続けるのは耐えがたいことだという暗い響きが感じられる。

過去の場面では、エーミールが「僕」に「けっこうだよ。」(P 215・L15)と言って「僕」の償いの申し出を断っている。きっぱりと強く言い放っており、エーミールが「僕」を軽蔑し、拒絶する冷たい響きが感じられる。

過去のこの経験が、「僕」つまり「客」の心に深く傷を残しており、現在の場面での「客」の「もう、けっこう。」という言葉は、エーミールから突きつけられた「けっこうだよ。」という言葉を受けたものとも考えられる。

次の表現も断りの意味をもっているが、それぞれに異なるニュアンスがある。また、文脈や語調によっても受ける印象が変わることがあるため、場面を想定して、声に出してやりとりをしてみるとわかりやすいだろう。

●「いいよ。」…「もう十分だ」「不要、無用だ」という断りの意味があり、親しい間柄の会話で使われる。しかし、返事に使う場合、「イエス」なのか「ノー」なのかが曖昧になることがある。

●「たくさんだ。」…「二度としたくないと思うほど懲りている」という気持ちが含まれる。

●「まっぴらだ。」…「どんなことがあると、それだけはごめんだ」という気持ちが含まれる。

●「遠慮しておく。」…もともとは、「他人に気を遣って控えめにする」という意味であり、遠回しに断る言い方である。

●「勘弁してくれ。」…「自分の罪や過失、無礼などを許してほしい」という意味であり、相手の希望や要求に応じないことを許してほしいということを表している。

●「いい加減にしてくれ。」…「我慢できる限度内にしてくれ」という意味であり、これ以上は我慢の限界を超えそうだということを示唆している。

令和 7 年度版『現代の国語』指導書・教材のご案内

セットで同梱	学習指導書 [各学年 上中下巻]	年間指導計画や教材の詳しい解説、標準的な学習指導の展開などを掲載。二次元コードの参照先では、学習指導の展開例の別案も掲載。
	「読み方を学ぼう」活用ガイド	「読み方を学ぼう」の 22 の方略について、授業で活用するためのガイドブック。
	データ資料集 DVD	教科書紙面の総ルビ PDF や「読むこと」教材の本文データ、ワークシート、テスト問題例、「話すこと・聞くこと」動画、「聞くこと」音声、二次元コードの参照先サイト掲載資料、年間指導計画作成資料などのデータを収録。
	朗読 CD	教科書に採録している全「読むこと」教材（資料編読書教材含む）の朗読を収録。各学年とも指導書セットに同梱。

指導者用デジタル教科書（教材）	総ルビ機能や図版等の拡大表示、音声再生箇所のハイライト表示機能など、デジタル教科書ならではの機能が満載。
教師用教科書（朱書編）	教科書紙面に教材の解説や指導のポイントなどを赤字で付記。

* 指導書・教材類は企画中のため、内容・仕様について、変更する場合があります。

* 「学習指導の展開例別案」のページは、現在準備中です。